慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	wohlは話法詞か心態詞か
Sub Title	Ist "wohl" Modalwort oder Modalpartikel?
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.17- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0383

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

wohl は話法詞か心態詞か

岩崎英二郎

副詞 wohl——ここでいう副詞とは，厳密な定義を経たものではなく，これまで一般に通用してきたごく常識的な意味での Adverb と考えていただきたい——には，いまさら言うまでもないことだが，次のようないくつかの異なる用法がある。

(1) Ich fühle mich nicht *wohl*.
(2) Ich sehe *wohl* ein, daß du unter diesen Umständen nicht kommen kannst.
(3) Das ist *wohl* möglich.
(4) Ich habe es *wohl* gehört, mochte es aber nicht glauben.
(5) Das hat er *wohl* nur getan, um uns zu ärgern.
(6) Das ist *wohl* nicht dein Ernst?
(7) Ob er *wohl* krank ist?
(8) Was wird sie *wohl* dazu sagen?
(9) Bist du jetzt *wohl* still!

これらの文例の配列の仕方には私なりの一定の基準があるつもりなのだが，それについてはここでは触れない。本稿の結論のところでおのずから明らかになることと思っている。また (1) から (9) までのすべての用法がそれぞれ異なっているわけではない。どれとどれが同じ用法か，あるいは別の用法か，そのあたりを見究めることが本稿の課題の一つであり，これまでこの問題を扱ってきた人たちの意見がさまざまな食い違いを見せているところでもある。唯一の例外は用法 (1) で，この用法の解釈についてだけは諸家の見解はすべて一致している。ここで wohl によって表現されているのは，さまざまな意味での「良好」あるいは「快適」な状態であっ

て，客観的な陳述内容(あるいは命題 Proposition) の一部としての〈様態〉を示しているのであるから，当然のことながら〈比較変化〉も可能である。

(10) Ist dir wieder *wohler*?
(11) Ich fühle mich unter Freunden *am wohlsten*.

(1) とは違って (2) から (9) までの wohl はすべて，厳密な意味で客観的な陳述内容の一部とは言いがたく，そこには多かれ少なかれ〈話し手〉が顔をのぞかせている。(2) を例にとれば，einsehen の事実ないし程度を話し手が wohl によって強調しているわけで，日本語で言えば「よく分かる」の「よく」のたぐいであると言えるだろう。この種の wohl に対して独々辞典などでは bekräftigt nachdrücklich, was von anderer Seite in Zweifel gezogen wird[1] とか，entkräftet einen Zweifel[2] などの説明を付けているが，この用法の特徴として，場合によっては sehr によって強調の程度をさらに高めることもできるという事実を挙げておこう[3]。

(12) Ich erinnere mich *sehr wohl* an diesen Vorfall.
(13) Ich verstehe dich *sehr wohl*.

(3) に挙げた Das ist *wohl* möglich. に使われている wohl も，もともとは (2) と同じ用法であって，「そのことは十分に可能である」の「十分に」という日本語に相当する表現であると言ってもよかろうが，ここで断っておかなければいけないのは，このような wohl には文の中で多少なりともイントネーション上のアクセントが置かれるということである。もしもこの wohl にアクセントが置かれない場合には，この文には別の解釈が可能になる。つまりそこには wohl の別の用法が考えられることになる[4]。

「よく」「十分に」「たしかに」などを意味する (2) と (3) の wohl は，aber, allein, doch などを伴うと，おのずから「たしかに...ではあるがしかし...」という zwar に似たニュアンスを帯びてくる。それが用例の (4) であるが，念のために実例をさらにいくつか挙げておこう。

Die Botschaft hör' ich *wohl*, *allein* mir fehlt der Glaube.

(Goethe : Faust)

Auf den Wangen der Kinder war durch das Gehen ein schöner rosiger Hauch erblüht und ihre Haare lagen *wohl* naß und zusammengeklebt, *aber* wunderschön um ihr Antlitz.

(A. Stifter : Katzensilber)

Es heißt *wohl*, ‚Gehet hin und lehret alle Heiden', *aber* schöner ist es *doch*, wenn die Welt, uns suchend, an uns herankommt.

(Th. Fontane : Der Stechlin)

以上見てきたとおり，(1) から (4) までの wohl の用法は，(3) のように文中のアクセントの有無によって解釈の変り得る場合は別として，全体としてはさほどむずかしい問題を含んでいるわけではない。われわれ外国人にとっても，これらの wohl を前にして解釈に窮するようなことはまずないと言ってよいだろう。

問題は (5) から (9) までに例示した用法である。本稿に「wohl は話法詞か心態詞か」という表題をつけたのも，実はもっぱらこれらの残りの用法だけを念頭においてのことであった。ここに用いられている wohl が文の中でどのような役割を演じているのか，そのはたらきは〈話法詞〉(Modalwort) に近いのか，それともむしろ〈心態詞〉(Modalpartikel, Abtönungspartikel) の一つと考えるべきなのか，以下それについて検討を加え，私なりの結論を出したいと思う。

その前に一言，数ある副詞，あるいは話法詞，あるいは心態詞の中から，いかなる理由でことさら wohl だけをここに取り上げたかについて述べておきたい。陳述内容と話し手とのかかわりを表現する手段はドイツ語でも複雑多岐で，特定の語類 (Wortklasse) だけに委ねられているわけではないことは言うまでもないが，その代表的な表現手段である Modalität に関しては，〈話法の助動詞〉(Modalverb) と並んで〈話法詞〉の存在がだいぶ前から指摘されている。その定義や具体的な語彙リストに関しての意見の違いはあるものの，独立の語類としてすでに大方の認知を受けてい

ると言ってよいであろう。

(14) Es wird *vermutlich* bald regnen.
(15) *Vielleicht* kommt er morgen.
(16) Sie hat *wahrscheinlich* recht.

これとは別に直接 Modalität を表わすものではないが，陳述内容に対する話し手のなんらかの心的態度を示すシグナルとしての語類の存在が，英語やフランス語と比べてとくにドイツ語の特色として脚光を浴びているが，これがいわゆる〈心態詞〉と呼ばれるものである。

(17) Du hast *aber* viel Bücher!
(18) Was ist *denn* mit ihm?
(19) Da kommt sie *ja*.

心態詞もまた，その定義をめぐってさまざまな見解があり，具体的にどの語をこれに数えるべきかについても意見が分かれているが，心態詞なる語類の存在について，これを真っ向から否定する人はまずないであろう。

上にも述べたとおり，話法詞にせよ心態詞にせよ，それらの語類に属する語の範囲に関して研究者たちの意見が一致するにはいまだほど遠い状況であるが，その反面，ある特定の語について，その語を心態詞と解すべきか，それとも話法詞の一つに数えるべきかについては，意見の違いはほとんど見られない。上に掲げた例文について言えば，(14) の vermutlich を心態詞と解釈したり，(18) の denn を話法詞と見做したりすることは，まず絶対にあり得ないのである。しかしそれもそのはずで，話法詞と心態詞とはそもそもまったく別な語類であり，両者の〈統語論上のふるまい〉(syntaktisches Verhalten) にも，両者が文中で果たしている機能にもおよそ類似点がないから，両者の混同はまず起こり得ないと言ってよい。ただしある語がいわば Homonym として両語類のいずれにも顔を出すことはないわけではない。

(20) *Vielleicht* habe ich mich geirrt.
(21) Aua, der Kaffee ist *vielleicht* heiß!

例文 (20) の vielleicht は「ひょっとしたら」「もしかすると」を意味する話法詞であり，(21) のほうは口に入れたコーヒーが予想外に熱かったことに対する話し手の〈驚き〉の発露としての心態詞である。

ところが wohl にかぎっては，これまで研究者たちによってあるいは話法詞の一つと考えられ，あるいは心態詞の一種と見做されてきた。たとえば Ursula Hoberg は話法詞という術語は使ってはいないものの，彼女のいわゆる SG-Adverbialgruppe なる語類の中で，wohl を vermutlich, vielleicht, wahrscheinlich 等々の他の話法詞と同列に論じているし[5]，Gerhard Helbig もこれを話法詞の一つに数えている[6]。これとは逆に Harald Weydt は wohl を心態詞の一つととらえ，その特性を話法詞と対比しつつ論じているし[7]，Duden の『現代ドイツ語文法』も心態詞のリストの中に wohl を挙げている[8]。また Schulz / Griesbach の『ドイツ語文法』でも，心態詞という言葉こそ用いていないが，Modalglieder という同文法独特の語類を設定して，wohl を denn, doch, ja 等々の心態詞の仲間として扱っている[9]，

ではこのような解釈の違いはどこから生じたのだろうか。まず考えられるのは，wohl の場合にも上に挙げた vielleicht の場合と同様 Homonymie の問題があって，ある種の wohl は話法詞，別種の wohl は心態詞の役割を果たしているのではないか，という当然の疑問である。結論を先に言えば，この問いに対する答はイエスでもあり，ノーでもある。まずイエスに関して言えば，上に挙げた Hoberg にせよ Helbig にせよ，wohl を話法詞と解する人たちは，いずれも wohl のある特定の用法だけを念頭に置いているという事実である。すなわちそれは冒頭に掲げた文例 (5) の用法であり，ここでの wohl の使い方を検討してみると，この用法にかぎっては wohl と話法詞とのあいだにある種の共通性が認められることが分かる。もっとも，話法詞の定義にはいくつかの考え方があることは前にも述べたとおりだが，wohl との共通点が見られるのは狭義の話法詞，つまり bedauerlicherweise, hoffentlich, leider のような話し手の心情的側面にかかわるものではなく，vermutlich, wahrscheinlich, sicher 等々のように，純

粋な Modalität に関するものである。

(5) の用例に見られる wohl が話法詞であるか心態詞であるかは別として，重要なことは，この wohl もあきらかに Modalität とかかわりがあるということである。具体的に言うと，「彼がそれをした意図は私たちに対するいやがらせ以外の何物でもなかった」という陳述内容の〈現実度〉ないし〈信憑性〉についての話し手のある種の判断が wohl によって示されているのである。

wohl と狭義の話法詞の共通性について論を進める前に，この種の wohl の実例をほかにいくつかお目にかけよう。

> Der Rücken schien hart zu sein ; dem würde *wohl* bei dem Fall auf den Teppich nichts geschehen.
>
> (Franz Kafka : Die Verwandlung)
>
> Er mußte *wohl* einmal, und vielleicht ganz frühe schon, dahingelangt sein, fundamental zu leugnen, daß es überhaupt irgendwo irgendetwas Neues geben könne.
>
> (Heimito von Doderer : Die Strudelhofstiege)
>
> Der Pfarrer Kreppel war nicht nur ein frommer, er war auch ein nationaler Mann. Deshalb *wohl* bewunderte ihn mein Vater, der zwar gläubig, vor allem anderen aber national gesinnt war.
>
> (Alfred Andersch : Die Kirschen der Freiheit)
>
> Sie schirmte ihre Augen ab mit einer Hand, sie versuchte *wohl* gegen die Sonne zu sehen.
>
> (Uwe Johnson : Mutmaßungen über Jacob)

上に述べたように Duden の『現代ドイツ語文法』も wohl を心態詞の一つに数えてはいるが，そこで例として挙げられているのは Bist du *wohl* still ! だけであって[10]，この用法には話法詞と共通するものは何もない。ところが同じ Duden 文法の別の箇所には明らかに wohl を話法詞と同一視していると思われるくだりがある。それは〈現在完了〉がどのような場合に〈未来完了〉の代りを勤めることができるかを論じているところであるが，説明を簡略にするために原文を引用しておこう[11]。

Grundsätzlich kann ein Perfekt das Futur II, wenn es eine Vermutung über ein vergangenes Geschehen ausdrückt, nicht vertreten, es sei denn, daß die modale Komponente ‚Vermutung' auf andere Weise, etwa durch Adverbien wie *wohl*, *vielleicht*, *wahrscheinlich*, *vermutlich*, gesichert wird:

Er *wird* seinen Schlüssel *verloren haben* / Er *hat* v e r m u t l i c h seinen Schlüssel *verloren*. (Aber nicht: Er *hat* seinen Schlüssel *verloren*.)

同書では話法詞 (Modalwort) という術語は採用しておらず，この種の語類は Modaladverbien zur Kennzeichnung der Einschätzung, der Beurteilung の中に含めているが[12]，上の引用文を見れば wohl もまた話法詞の一つと考えられていることは明らかである。同様にまた，この種の wohl と狭義の話法詞のあいだには，陳述内容の妥当性についての話し手のなんらかの判断，上の引用文の言葉を借りるならば話し手による〈推測〉(Vermutung) という共通項があることもまずまちがいのないところである。

(22) Sie ist *sicher* krank.
(23) Sie ist *vermutlich* krank.
(24) Sie ist *vielleicht* krank.
(25) Sie ist *wahrscheinlich* krank.
(26) Sie ist *wohl* krank.

このように並べてみると，wohl だけを特別視する理由はなにもないとさえ思えてくる。それではなぜ wohl だけにかぎって，これをすっきり話法詞のグループに仲間入りさせることができないのだろうか。理由は簡単である。一般に認められている話法詞に共通する性質が wohl にはあまりにも欠け過ぎているからである。話法詞とは何ぞやという議論をここで蒸し返す余裕はないが，wohl に欠けている話法詞の若干の特性を箇条書きに記しておこう。

1) 話法詞は単独で文の前域を占めることができる。

Vielleicht ist sie krank.

**Wohl* ist sie krank.

2) 話法詞は単独で決定疑問に対する答えとなりうる。

Ist sie krank?——*Wahrscheinlich.*
Ist sie krank?——**Wohl.*

3) 話法詞は疑問文では用いられない。

*Was wird er *vermutlich* dazu sagen?
Was wird er *wohl* dazu sagen?

4) 同一文の中で2個以上の話法詞を同時に用いることはできない。

*Das wird dir *vermutlich schwerlich* gelingen.
Das wird dir *wohl schwerlich* gelingen.

5) 話法詞には文のイントネーション上のアクセントを置くことができる。

このように話法詞の重要な特徴の多くが欠落している wohl を，それにもかかわらず話法詞と見做すにはやはり無理があると思わざるを得ないが，次に当然問題となるのは，それではこの種の wohl はもしかすると心態詞なのではないか，ということである。心態詞とは何ぞやということは，話法詞の場合よりもさらにいっそう定義づけがむずかしく，いわば決め手を欠いているというのが実状であるが，それでも心態詞と話法詞とを区別する重要な手がかりがないわけではない。たとえば上に箇条書き的に挙げた話法詞の特性が心態詞にはすべて欠けている(その点では wohl はたしかに心態詞に近いと言える) ということもその一つであるが[13]，両者を分かついちばんの違いは，一般に話法詞には話し手が陳述内容をどのように判定評価しているかを表わす実質的な意味がそなわっているのに反して，心態詞の場合にはその意味がおおむね極度に稀薄化して，単に話し手のさまざまの心の動きを聞き手に伝えるシグナルのはたらきしかもたない，という点にあるのではないだろうか。上に掲げた (22) から (26) まで

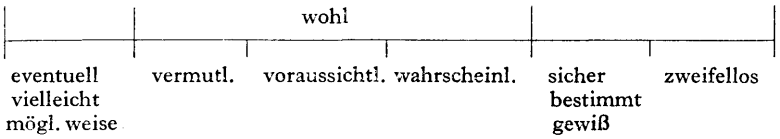
の文例について言えば，sicher, vermutlich, vielleicht, wahrscheinlich はいずれもそれぞれ固有の意味をもっており，であるからこそ sicher を用いれば話し手が「彼女が病気である」ことを確信していることが，また vielleicht を使えばその事実をあまり信じていないことが，聞き手にはっきり伝わるのである。ついでに言えば，独和辞典でこれらの話法詞にそれぞれ特定の訳語を与えることがおおむね可能であるのも，話法詞が実質的な意味をもっていることの間接的な証左であろう。それでは文例 (26) の wohl についてはどうであろうか。

ここでしばらくのあいだ本題を離れて，辞書の訳語の可否に言及することをお許しいただきたい。wohl が心態詞であるか否かを検証するのに，この回り道が実はいちばんの近道であるように思われるからである。話法詞にはおおむね日本語の訳語を与えることができる (例：sicher きっと；vermutlich 推測するところ，おそらく；vielleicht ひょっとすると) ことは上に述べたが，心態詞の場合には意味が極度に稀薄化しているために，むりにこれに特定の訳語をつけることは百害あって一利なしであり，むしろ積極的に訳語を断念すべきであるという意見を私はかねがねもっているが[14]，ここで問題になっている wohl について，現在市販されている独和辞典はこれをどのように扱っているであろうか。予想されたとおりすべての辞書がこれに訳語をつけており，「たぶん」「おそらく」もいう訳が圧倒的に多い。「どうやら」「たしかに」「きっと」などの訳語も散見する。いずれにしてもこれらの辞書の執筆者たちがすべて wohl を他の話法詞と同類視していることが容易に想像されるのである[15]。このような辞書を通じて wohl の使い方を学んできた私たちの頭の中に，wohl すなわち「おそらく」「たぶん」であるという等式が無意識のうちに成立してしまって，そのことが wohl の正しい理解をいっそう困難にしていると思われるのだが，それでは native speaker であるドイツ人の場合はどうであろうか。

きわめて示唆に富むと思われるのが Weydt の見解である。彼は Das ist *wahrscheinlich* mein Freund. と Das ist *wohl* mein Freund. を比較して，wahrscheinlich と wohl の違いをなんとか説明しようと試みている[16]。

ということは——ここが大切なところだが——native speaker の Weydt にとっては両者が異質の語であることは自明の前提なのであろう。Weydt によれば，第1の文での話し手は wahrscheinlich なる語によって，「それが(いま玄関でベルを鳴らしたのが)私の友人である公算が大きい」ことを〈事実〉(ein Faktum) として主張しているという。すなわち wahrscheinlich は話し手の〈判断〉(Urteil) の一部であるという。これに反して第2の文での wohl の役割は，Das ist mein Freund. という話し手の判断についての判断 (das Urteil über das Urteil) であり，「それが私の友人である」という判断について，それは確かではないという別の判断が wohl によって示されているのだとしている。この説明は正直なところ私にはそれほど説得性があるとは思えないが，wahrscheinlich と wohl が発話のそれぞれ異なるレベルに属するものである (Weydt はこれを Darstellungsebene, Intentionsebene と呼んでいる) という彼の考え方には，この wohl を心態詞と解する立場からは十分にうなずけるものがある。

wohl が心態詞であるとすれば，たとえば「たぶん」「おそらく」などの日本語の訳語に見られるような実質的な意味がもはやこの語にはそなわっておらず，意味の空洞化がある程度進行しているはずである。このようなことは native speaker でもない私たちの軽々に判断すべきことではないが，陳述内容の信憑性についての話し手の〈確信度〉(Sicherheitsgrad) の大小に関して Ursula Hoberg が提示した話法詞の配列表は，いくぶんこの事実を裏書きしているように思われる[17]。



この表では左から右に向かって目盛りが進むに従って〈確信度〉が高くなってゆくのだが，ひとり wohl だけが vermutlich から wahrscheinlich までにまたがる広い幅を占有していることは，この表が Hoberg の主観的

色彩の濃い仮りの試案であることを割り引いても，wohl の意味の稀薄化の度合いを暗示しているように思えてならない。あくまで仮設の上に立っての推論で恐縮だが，もしこの wohl が心態詞であるとしても，他の心態詞とはかなり毛色の違った，いわば Modalitätspartikel ともいうべき特殊なものということになるだろう[18]。陳述内容の現実度についての話し手の評価を示している点では狭義の話法詞と共通のものをもっているが，話法詞のようにその評価を語彙のもつ意味によって明示するのではなく，陳述内容の信憑性についての話者のいささかの疑念，それを 100 パーセント確信することのできない話し手の心の揺れを聞き手に伝えるシグナルのはたらきをしているのではないだろうか。かつて井口靖氏がこの種の用法について，「wohl は特定の可能性の高さを表現するのではなく，純粋に発話内容に対する話し手の働きかけという機能だけを有するのではないか」と書いておられたが[19]，これもまた wohl の意味の稀薄化を認めた上での発言だったのではないだろうか。

以上くどくどと書き連ねてきたが，すでにお察しのとおり，文例 (5) の wohl は——したがって文例 (26) の wohl もまた——話法詞ではなく一種の心態詞と考えるべきではなかろうかというのが，現段階での私の結論である。そしてもしも (5) の wohl が心態詞であるとすれば，(6) から (9) までの wohl も当然すべて心態詞ということになる。ただしこれらは (5) とは違って Modalitätspartikel ではなく，それぞれに異なる話し手の心のあやを聞き手に伝える別種の心態詞である。たとえば (6) の Das ist *wohl* nicht dein Ernst? を Das ist *doch* nicht dein Ernst? と比較して，doch と wohl のニュアンスの差を考えてみたり，(9) の Bist du jetzt *wohl* still! と Bist du jetzt *mal* still! とでは叱責のきびしさがどちらのほうがより大であるかを探ってみたりすることも，wohl の使い方を正確に把握する上で大切であろうが，その検討はまたいずれ後日のことにしたいと思う。

注

1) Duden: Deutsches Universal Wörterbuch. Mannheim 1983.
2) Kempcke, G.: Handwörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Berlin

1984.

3) 本文では述べなかったが，先に挙げた例文 (1) のタイプの wohl も sehr によって強調できることは言うまでもない：Nach dem Urlaub sah er *sehr wohl* aus.

4) 別の用法とは，たとえば Das ist *wohl* nicht möglich. に見られる wohl の用法と同じで，「それは可能であろう」という話し手の〈推測〉の気持が籠められている。これについては例文 (5) のところで詳しく扱う。

5) Hoberg (1973) S. 87-88. なお SG-Adverbialgruppe の SG とは Sicherheitsgrad の略であり，英語の degree of belief のドイツ語訳である。したがってこの語類は陳述内容の信憑性についての話し手の〈確信度〉を示す副詞群，言いかえれば狭義の Modalwort と同じものと考えてよいだろう。

6) Helbig (1981) S. 121.

7) Weydt (1969) S. 63-66.

8) Duden (1984) S. 351-352.

9) Schulz, D. / Griesbach, H. (1970) S. 349-355.

10) Duden (1984) ibid.

11) Duden (1984) S. 152.

12) Duden (1984) S. 351. ここでこの語類の例文として挙げられている

Er kommt *vielleicht* / *möglicherweise* / *womöglich* / *wohl* zu Besuch.

を見ても分かるように，Duden 文法では wohl はその使い方によって心態詞と話法詞の双方に分類されている。

13) 心態詞の中には，箇條書きにした話法詞の条件のうち，4) の条件を満たすものもあるが，それは例外としてここでは無視することにする。

14) 岩崎 (1986) 参照。

15) かく言う筆者も『独和大辞典』(小学館 1985) の中で同じあやまりを犯している。

16) Weydt (1969) ibid.

17) Hoberg (1973) S. 99.

18) Modalitätspartikel という術語は Helbig から借用した—Helbig (1981) S. 105—. 彼はそこで Isačenko の説を援用して，話者の主観的な Modalität についてのさまざまな表現手段を次のように例示している：

1) Er hat sich *vermutlich* verspätet. (Schalt- bzw. Modalwort)
2) Er hat sich — *wie ich vermute* — verspätet. (Schaltsatz)
3) Ich *vermute*, er hat sich verspätet. (modales Vollverb)
4) Er *dürfte* sich verspätet haben. (Modalverb / Modus)
5) Er *wird* sich verspätet haben. (Futur II)
6) Er hat sich wohl verspätet. (Modalitätspartikel)

19) 井口 (1982) S. 16.

参考文献

Admoni, W. (1970): Der deutsche Sprachbau. München.

Asbach-Schnitker, B. (1977): Die Satzpartikel „wohl", in: Weydt, H. (Hrsg.): Aspekte der Modalpartikeln. Tübingen.

Duden (1984): Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Mannheim.

Helbig, G. (1981): Die deutschen Modalwörter im Lichte der modernen Forschung, in: Beiträge zur Erforschung der deutschen Sprache, Bd. 1. Leipzig.

Helbig, G. / Buscha, J. (1984): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig.

Helbig, G. / Kötz, W. (1981): Die Partikeln. Leipzig.

Hoberg, U. (1973): *VIELLEICHT — WAHRSCHEINLICH — SICHER* Bemerkungen zu einer Gruppe von pragmatischen Adverbialen, in: Sprache der Gegenwart, Bd. 24. Düsseldorf.

Kötz, W. (1984): Übungen zu den Partikeln. Leipzig.

Saidow, S. (1969): Klassifikation der Modalwörter der deutschen Sprache, in: Deutsch als Fremdsprache 4 / 1969. Leipzig.

Schulz, D. / Griesbach, H. (1970): Grammatik der deutschen Sprache. München.

Weydt, H. (1969): Abtönungspartikel. Die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen. Bad Homburg.

Weydt, H. / Hentschel, E. (1983): Kleines Abtönungswörterbuch, in: Weydt, H. (Hrsg.): Partikeln und Interaktion Tübingen.

Weydt, H. / Harden, T. / Hentschel, E. / Rösler, D. (1983): Kleine deutsche Partikellehre. Stuttgart.

岩崎英二郎 (1986): 独和辞典と心態詞 (「エネルゲイア」第 12 号)。

井口靖 (1982): wohl と法副詞の意味特徴 (「ドイツ語教育部会会報」第 21 号)。

井口靖 (1986): 文の意味構造における Modalwort の位置付け (「エネルゲイア」第 12 号)。